



第48号 2025.1.1発行  
 発行者：株式会社コロラボ  
 編集者：JO編集委員会

# この物語を、次の世代に 伝えていくことが 自分の使命とっています。

流れる雲よ横浜実行委員会

丹野快一さん・勝又恵子さん



昨年初演から25周年を迎えた特攻隊を題材にしたミュージカル『流れる雲よ』。この作品の共感した人たちが全国各地で自主的に実行委員会を立ち上げる中、一昨年より横浜公演を主催し大成功をおさめている。

江森：お二人とはNPOの活動なども含め長年公私にわたるお付き合いをさせてもらっています。今日は『流れる雲よ』という特攻隊を題材にしたミュージカルの横浜公演を、2年続けて実現された実行委員会の委員長・副委員長という立場でお話を伺いたいと思います。

まず特攻隊を扱ったものというと、小説や映画はたくさんありますがミュージカルというのは珍しいように思います。この作品はどのようにして誕生したのでしょうか。

勝又：この作品の脚本を書いている草部さんと、一昨年まで本公演に出演されていたArcheさんがラジオ番組をやっていた関係で、元々はその番組内でのラジオ劇として書かれたものなんです。どういう経緯かわかりませんが25年前にラジオ劇がミュージカル化され現在まで続いていると

いうことです。私は12年前に初めて『流れる雲よ』を観ましたが、その頃は本当に小さい劇場でミュージカルとは謳っていませんが、今ほど歌や踊りはなく、演劇に近い作品でしたね。その後エンターテインメントとしてもっと観やすいものになろうと改良を重ねて今のようなスタイルになったのだと思います。

江森：それで話の中にラジオが出て来たりするんですね。そして24年目にして丹野さんが横浜公演に名乗りを上げるわけですが、これはどういう経緯で？

丹野：僕が初めて舞台を観たのは3年前なんですけど、この物語は子どもたちの世代に伝えていかなきゃいけないって思っちゃったんですね。うちの息子が当時17歳で特攻隊の人たちと同年代だったということや、その年の1月に知覧の特攻平和会

館に初めて行ったことなど、タイミング的にちょうど重なったということもあると思いますが、観終わってすぐに横浜でやるにはどうしたらいいでしょうか？って後援会長に聞いてました(笑)。

勝又：その後援会長というのは私の大恩人で、丹野さんがやるならあなたも手伝いなさいって言われて「はい」と言うしか選択肢がありませんでした(笑)。

丹野：全国各地で実行委員会が立ち上がって地方公演をやっているというので、すぐに3か所観に行つて、もうそのときにはすっかり横浜でやる気になって運営側の立場で見ましたね。

江森：うすーい関わりの中で、私も皆さんの活動を横から見てましたけど、特に1年目は結構大変そうでしたね。

勝又：劇団とのやり取りが大変だよって言

われてはいたんですよ。1回目のときに照明を実行委員会で用意してくれて言われた、劇団からはスポットライト2つ動かせれば大丈夫と聞いていたので、音響が専門の知り合いに無理言つて頼んだんですけど、いざ打ち合わせしてみたら全然そんなレベルじゃなくて…本職の照明さんじゃなきゃとても対応できないことがわかって、あれは焦りました。協賛金も集めて、チケットも売って、みんな来てくれるのに公演ができなかもしれないという危機です。本当に怖かった。結局劇団に泣きついて、劇団の社長が当日の照明もやりました(笑)。

江森：今年はどうしたの？

勝又：今年是最初から劇団に丸投げです。もうできませんって(笑)。

丹野：集客も大変でしたね。昨年は何ともあれまずはお金だということで、協賛金



集めを必死にやっただけです。何とか目標額に達したはいいんですけれど、会場が450人入るホールだったので、協賛の方が全員来てくれたとしても三分の一も埋まらないんですよ。お金は足りてても会場がガラガラじゃカッコつかないということ、それからSNSもやったし、西公会堂の近くのお店に通ってチラシ置いてもらったり、周辺のお宅にポスティングも結構やりました。

**江森**…ポスティングなんかやってたんだ！それは大変でしたね。1年目のときはスタッフも少なかったしね。

**丹野**…それも苦労しましたね。実行委員会の立ち上げ4人でしたからね（笑）。

**勝又**…キックオフ会議のとき後援会長に「普通は20人ぐらいいるもんだぞ、大丈夫か？」って心配されましたけど、そこから声掛けして、結局実行委員引き受けてくれたのは全員\*まちbri-zの人たちでした。丹野さんが10年かかって築き上げた信用の賜物です。

**丹野**…2年目もほぼ全員残ってくれてありがたかったです。いい仲間ができて感謝です。

**江森**…観客の反応はどうですか？

**丹野**…観てくれた人の反応はすごくいいですね。あんまり

反応がいいので、1年目の実行委員長挨拶で「来年もやります！」って思わず

言っちゃったぐらいです（笑）。

**江森**…あれびびくりしたよね（笑）。

**勝又**…ちょっと何言ってるのよ！って思いました（笑）。

**丹野**…いやでもそう言いたくなるぐらい、すごく感動したとか、やっぱり伝えていくべきだよねとか、子どもと一緒に観たいとか、そういう声をたくさんいただきました。そして何といっても一番嬉しかったのは、実行委員会に高校1年生が入ってくれたことです。

**江森**…昨年これを観て来年は実行委員会に入りたと言っていた方ですね？この作品のどこが刺さったのかな？

**勝又**…学校がそういう教育をしてるみたいですね。戦争の勉強をしたり、沖縄に行つて戦争体験者の話を直接聞いたりとか。そういう下地がありながらミュージカルを観たことで、自分ごととしてリアルにイメージできたんじゃないかな。それでみんなに伝えたい！ってなつたみたい。

彼女は来年もやるって言ってます。この前の実行委員会ですけれど、私は皆さんと会える実行委員会の日は、前日からわくわくしちゃうって、ああ明日だと思ってました。かわいいですよ。え、来年の目標は、学校で『流れる雲よ』の試写会をやることだそうです。そのため生徒会の役員選挙に立候補したんです。今年のアンケートでも15歳と20歳の女子が実行委員会に入りたいに○をつけて、感想もたくさん書いてくれました。若い世代にも着実に広がっています。

**江森**…批判的な意見はないんですか？

**勝又**…アンケートではありませんが、直接聞いたところでは、良かったけど自分ごと

としては考えられなかったとか、国歌斉唱が怖かったという意見はありましたね。

**江森**…国歌斉唱は私もどうかと思いましたが。国歌つて歌つてチューエーションが決まってるでしょ。卒業式とか表彰式とかサッカーの試合前とか。それをミュージカルの公演で歌うのはふさわしいと思わないし、何か別の意図があるんじゃないかって訝ってしまふ人もいますよ。

**丹野**…もつとたくさんの人に観てもらうためには、舞台の前後も含めた演出面で検討すべきところはありますね。

**江森**…私は地方公演の催行形式、つまり実行委員会が主催するという形式に限界があると思います。みんなボランティアだし、思いが出すぎるといふか、やっぱりイデオロギーが露呈してしまうのを避けられない。

**勝又**…でも主催者としては思いを伝えたくてやってるわけだから、それができなきゃやってる意味ないって思いますよ。

**江森**…その思いはエンタメ作品として観たい人には雑音になる場合もあるだろうし、主催者によっては偏ったプロパガンダに利用される危険もある。あくまで劇団が主催して実行委員会は黒子に徹した方が良いと思います。

**丹野**…これは脚本家の草部さんが言ったことですが、これまで25年間右左だどさんざん言われながらやってきたけど、一番気を付けてきたのは真ん中でいようということだと。劇団としては何かを押し付けたりするつもりはなく、観る人が自由に感じてくださいというスタンスで作っているんだと思います。でも僕は『流れる雲よ』に関わったことで、日本が大東亜戦争を始めた理由、欧米に植民地化されたアジア諸国

を解放するためだったということを知って、日本人として誇らしいと思いましたが、そういうことを知れたのは良かったと思っています。

**江森**…それがすでにバイアスかかってることなんだけども（苦笑）。戦争を始めた理由なんて、それこそ何通りもの解釈があるし、実際当時の政府や軍にだっていろいろな考え方の人がいたわけですよ。この作品は植民地解放だからという理由で戦争を正当化することを意図しているわけじゃないでしょう。自分の子どもが生まれるって日に「俺が行かなきゃ誰が彼らを守るんだ」なんて悲しいセリフを、もう二度と日本国民に口にさせてはいけないという思いを強くするために観てほしいと思います。

**丹野**…これまでの2回はとにかく無事に開催することに必死で、他でやっていることを真似してただけで、自分たちの公演をどうやっていこうかなんて考える暇もなかったんですけど、次回はちゃんと考えたいですね。

**勝又**…今回公演のPRも兼ねて試写会をやったんですけど、試写会だけで終わりにつまらないので、観終わってから少しディスプレイの時間をとってなんです。そういうことが大事なんだろうなって思います。そっちがメインでもいいくらい。

**江森**…それはいいことですね。戦争のことなんて普段あまり話す機会がないからタブー化しやすいけど、そうやってみんな話すことで平和を誓う気持ちが強くなっていくのではないかと思います。来年もがんばってください！

\*まちbri-z

横浜市青葉区を中心に活動している起業支援ビジネス「コミュニティ」まちなかbri-zのおぼ



# フリーランス保護新法2024年11月1日施行。発注者に保護義務付け。

組織に属さず個人で働くいわゆる「フリーランス」の労働環境を保護することを目的とした「フリーランス新法（フリーランス・事業者間取引適正化等法）」が昨年11月1日施行され、フリーランスに業務委託を行う発注事業者に対し、業務委託をした際の取引条件の明示、給付を受領した日から原則60日以内での報酬支払、ハラスメント対策のための体制整備等が義務付けられました。

自身が持つ知識やスキルを活用しながら個人で事業を営むフリーランスは、コロナ禍における働き方の変化、テレワークインフラの普及なども追い風となつて近年増加

傾向にあります。一方でフリーランスと発注者との間でさまざまなトラブルが起ることが懸念されていました。

フリーランス新法におけるフリーランスは法律上の定義では「特定受託事業者」とされ、発注事業者が業務委託を依頼する相手方かつ、従業員を雇わない事業者のことです。このフリーランスに対して、発注側がフリーランスか否か、契約期間が一定以上の期間になるかどうかで、発注側に課せられる保護義務が3種類に分類されます。

## ①フリーランスがフリーランスに発注するケース

このケースでは、発注側のフリーランスに対して、取引条件を書面等で明示することが求められます。取引条件とは、業務内容・報酬額、支払期日など一般的に契約書に記載されるような内容のことであり、これらを書面や電子メールなどで事前に明示する必要があります。

## ②従業員を雇用している組織がフリーランスにスポットで発注するケース

このケースでは①の内容に加えて、60日以内の支払、募集情報の確表示、フリーランスへのハラスメント対策が追加されます。

## ③従業員を雇用している組織がフリーランスに一定期間以上継続して発注するケース

このケースでは①②に加えて、支払拒否や返品など法律に定められた7つの禁止事項の遵守、子育て・介護への配慮、中途解約時の事前予告義務が追加されます。

この法律には発注側の規模の制限はなく、すべての取引に適用されますので、フリーランスへの発注の際には注意が必要です。新法対応の発注書や取引確認書等のフォーマットを事前に用意しておくとい良いでしょう。詳しくは厚生労働省のサイトをご確認ください。



## 益者三樂 損者三樂

料理にまつわるエトセトラ

江森克治

全国各地の出張先で横浜から来たと言うと7割ぐらいの確率で「中華街ですね！」という反応が返ってくる。みなとみらいも随分発展したし、野毛あたりも全国に名を知られるようになってきてはいるが、やはり横浜＝中華街なんだなと、ちょっとがっかりしたような、それでいてホッとしたような複雑な気持ちになる。小生が子どもの頃は法事などで親族が集まると決まって中華街に出かけ、お決まりの店でお決まりの料理を食べたものだ。耳の赤いチャーシューと蟹肉入りふかひれスープが好物だった。時代とともにそういったトラディショナルな中華料理店が少なくなり、最近では外で食べるスタイルの店頭販売が賑わっている。肉まんぐらいなら歩きながら食べるのも一興だろうが、小籠包を立って食べている人を見るとなんだか落ち着かない。

横浜中華街の歴史は開港当時まで遡る。植民地の中国を拠点にしていた欧米人に連れられてやってきた中国人が、商店や飲食店を現在の中華街付近に開業したのが中華街の起源とされる。大戦後、戦勝国となった中国から送られてくる豊富な物資で闇市として賑わったが、朝鮮戦争の終結とともに軍人がいなくなり、閑散とした街になっていった。そんな状況を見かねて、横浜市と横浜商工会議所が1953年に「チャイナタウン復興計画」を打ち出し、「善隣門」の前身となる「牌樓門」を建設、現在に至る発展の礎となったようである。

中華街の復興に行政と商工会議所が乗り出すあたり、横浜らしいというか、みんなで作ってきた街なんだなと思う。

そんな歴史の影響かどうかはわからないが、横浜には確かに中華料理の文化が浸透している。小生の実家では週に何回かは中華風のおかずが食卓に上っていたし、餃子も焼売も家で手作り。それが当たり前と思っていたが、他所でこれを言うと驚かれることが多い。

当然我が家でも中華調味料はひと通り常備している。今日は冷蔵庫の在庫一掃「鶏と野菜の辛し炒め」。豆板醤のさわやかな辛味にナンプラーで風味付け。

## 夏休み企画「じぶんだけのノートをつくらう」ワークショップ。昨年に続き開催

8月1日、ありがとうの日の企画として、「じぶんだけのノートをつくらう」を昨年に引き続き開催しました。夏休み中の小学生に普段できない体験を提供しつつ、地域の皆様にコラボの名前や業務内容を知ってもらうことを目指した企画です。

近隣小学校への告知とポスター掲示により、この日を楽しみにしてくれていた子どもたちで、開場前から行列ができる大盛況！急遽PCを1台増やして対応しました。

子どもたちは8種類のデザインと15色の背景色から好きな組み合わせを選び、名前を自分で入力して世界に1つだけのオリジナルノートを作成。どの色が良いか悩んだり、キーボードでの文字入力に苦戦したりしながら、印刷機からノートが出てくると歓声が上がリ、一人ひとりが貴重な体験を楽しんでくれているようでした。

子どもと保護者をあわせて前年の2倍以上となる50名が参加。昨年参加した友達から聞いたという子もいて、夏休み恒例のイベントになればと願っています。



## 社会課題にアプローチする多様な取り組みを応援

社会課題が多様化・複雑化する今日、当社ではなかなか取り組めない課題へのアプローチを協賛というスタイルで応援しています。当社では「CSRの取り組みの一環として」というフレーズで済ますことなく、協賛対象の取り組み内容や、その活動がもたらす社会的インパクトや当社への影響等を慎重に評価した上で、協賛の是非を判断しています。

今年は特に、地域社会に貢献し、社会課題にアプローチする取り組みに注力。以下の2つの活動に協賛することを決定しました。

### 特攻隊ミュージカル「流れる雲よ」への協賛

先人たちの想いや歴史を後世に伝えることを目的とするこのミュージカルを通じて、家族や故郷を大切にしている気持ちや、地域文化の発展に寄与するイベントとして注目しました。

### 特殊詐欺防犯啓発イベント「だまされないプロになろう!!」への協賛

高齢者を狙った特殊詐欺被害が社会問題となる中、演劇集団「表現のチカラ」が主催する防犯啓発イベントは、エンターテインメントを通じて詐欺の手法を分かりやすく伝え、高齢者を守る活動。プロの俳優が出演する防犯劇により、楽しみながら学べます。プロとしての技術を社会課題解決につなげるアプローチに賛同し、高齢者の安全を守る活動への協賛を決めました。

当社では「CSR活動は単なる企業イメージの向上ではなく、社会との協働を通じた課題解決を目指すものであるべき」と考えており、地域社会の様々な課題解決に企業が積極的に関与することは、地域社会の安全や発展のみならず、企業のイノベーションや成長にもつながるものと確信しています。

## ソーシャルえほん新タイトル『再エネってなあに?』発行

2025年1月、コラボソーシャルえほんシリーズから新タイトル、『再エネってなあに?』が発刊されます。

気候変動による異常気象が原因とみられる、自然災害、農作物被害、熱中症等の健康被害などの実害が発生しており、もはや放置しておくわけにはいかなない状況です。

本書では、なぜ温暖化対策なのか、その解決策のひとつとして再エネが有効であること、そして再エネにはどんなものがあるのかなど、小学生にも伝わるように優しいタッチのイラストを交え解説しています。もちろんSDGsの取り組みになることもお伝えしています。

地域で、職場で、学校でソーシャルえほんをご活用いただき、温暖化対策の初めの一歩として「私に何ができる?」を考えるきっかけにしてみてください。



J〇(ジエイ・オー)2025年1月号(第48号)  
 発行者：株式会社コラボ  
 横浜市神奈川区大口仲町108番地  
 TEL:045(431)6611  
 FAX:050(3730)6273  
 URL: <https://www.cocollabo.jp>

